

## 「実践国文学」一〇〇号に寄せて

私は大学国文学科を一九七四年に卒業。副手を二年間務め、大学院に進学しました。しかしながら子育てとの両立で修士課程は四年、博士課程も四年で離籍。その後は三谷栄一先生の紹介で、出版社の辞書の仕事を暫くしておりましたが、論文に取り組む事もなく学窓から離れた生活を過ごして参りました。

学生当時、コピーはまだまだ高嶺の花、ノートに参考文献や資料を書き写すのが日常でした。卒論の為に天理図書館に通い説話本を閲覧した時は書き写して腱鞘炎を起こしたことも。学会誌は、活版印刷でした。校正の度に印刷所に詰めて、急ぎの時は版組の活字をその場で組み直して貰い、刷り直しを持ち帰る事もありました。電卓も貴重品で、入試の採点計算の折は教務課から貸し出しを受けました。

### 竹内節子

ただ、従来の研究の傍では新たな技術が静かに動き出していたように思います。国文学研究資料館が貴重本をマイクログフィルムに収めてデータ化を始めた時期であり、近世研究室の貴重本の写真撮影にマスクと白手袋をつけて立ち会う事もありました。近い将来、各地の図書館に足を運ばなくても多くの資料を見る事が可能になり、研究の方法も変化して行くのかと未来に希望を感じたものです。

さて、今から五年ほど前に国文学科卒業生の会である実践国文学会からお誘いを受けて、国文学科創設一〇〇周年のお手伝いをする機会を得ました。

渋谷キャンパスで文科省の私立大学研究ブランディング事業関連の講演会やイベントに参加して、学内外の先生方の講演を拝聴致しました。

その中で白戸満喜子氏は「源氏物語古筆切の料紙」の演題で、古筆切を料紙の構造分析や文字の形状という視点で講演されましたが、科学分野からの視点が国文学の研究の可能性を広げている事に驚かされました。

四十数年前に私が思い描いた世界を遥かに超えた現在、情報にアクセスする事で多くの知識は何時でもどこでも享受出来るようになりました。一方で、先人達が大切に受け継ぎ守ってきた作品や資料の存在価値は一段と重要性を増し、その分析や精査が間断なく進化している事を再確認しました。

私の小さな思いも含めた「歴史」や「実績」をバックボーンに持つ「実践国文学」は研究者の発表の場として、その存在意義が益々大きくなると思います。

一〇〇号を迎えた「実践国文学」が、今後も研究者にとって自由に翼を広げられるステージで在り続ける事を祈念しております。

(たけうち せつこ・実践女子大学大学院

昭和55年度修了生)